



子どもの6分の1 — 6人に1人が貧困状態に陥っているといわれる現在の日本。この連載では、その6分の1の子どもたちの現状と、この地域で「子ども貧困」の解決に取り組む団体の活動をご紹介します。

対談 岡崎 勝氏 [名古屋市小学校非常勤講師] × 織田 元樹 [ボラみみより情報局 代表]

現実の「貧困」は手ごわい！～支援の道を探ろう～

2015年4月から始まったシリーズ「6分の1の子どもたち」を終了するにあたって、現在の子どもの貧困問題を捉え直すべく、連載第1回目の執筆者・岡崎勝先生と織田代表の対談を行いました。この2年半で貧困問題とその支援はどのような変化を見せたのか？新たに出現した貧困層、ゆとりのない社会、現代に欠けている一人前像、標準化された人生コースの矛盾…などなど、現代の子どもたちを熟知する岡崎先生ならではの話を聞くことができました。

支援に関われないケースが出てきている

岡崎 まず「支援はどう変化したか？」の部分で言うと、かなり広がってきましたが、頭打ち状態だという印象です。僕の関わっている範囲だと“危機的な貧困状態なのに支援に関われない子ども”が顕在化してきた、あるいは増えてきた気がします。例えば、名古屋市には高所得者地域と低所得者地域がありますよね。実は豊かな地域の方で貧困家庭が出てきます。親はもともと安定した収入がありましたが、リストラや病気、過労死などの影響で家庭が急に貧困になっていく。ところが、残された親や、仕事をなくした親のプライドが高いために、貧困であることを隠してしまうことがあります。

織田 親がそんな状態の時、子どもはどんな反応を示すんですか？

岡崎 どの子にも共通しているのは、自分の家庭について絶対に喋らなくなることです。そうすると一緒にいた友達と遊べなくなって、自己肯定感が減退していき、同じ空間では生きられないと思い込んでしまいます。また、最近ではシングルファーザーの方も若干増えていて、ここでも特別な問題が出てきています。

織田 どんな問題ですか？

岡崎 シングルファーザーの方の多くは非正規労働です。残業もあれば、仕事を持ち帰ることだってある。そのために子どものケアができず、実質的なネグレクトになってしまっているんです。生活に必要なお金は渡すんですが、中学生くらいまでは声をかけてあげないと学校へ行かなくなってしまう。小さい子だと親のケアがほしいという気持ちもあります。でも、お父さんたちは「小学生なら何でもできる」と思っている。子どもを預けられるところが近くにあればいいんですが、近所付き合いがないのでそれも難しいんですよね。

標準化された人生コースは“豊か”なのか？

織田 こうした新しい貧困層の出現に対して、もともと収入が低い貧困層には変化がありますか？

岡崎 絶対数がどのくらい減ったのかは分かりませんが、以前に比べたら豊かになってきたと思います。ただ一点、僕が気にかけているのは、相対的貧困とす

プロフィール



名古屋市小学校
非常勤講師

岡崎 勝

1952年、名古屋の港の生まれ。現在は名古屋市立小学校非常勤講師。『おそい・はやい・ひくい・たかい』の編集人、『ちいさい・おおきい・よわい・つよい』編集委員を務める。



特定非営利活動法人
ボラみみより情報局 代表

織田 元樹

1999年に特定非営利活動法人 ボラみみより情報局を設立。現在は代表兼職員として、ボランティア情報誌の発行のほか、愛知県被災者支援センターの運営など多くの事業に携わる。

る基準の考え方です。例えば「スマホを持ってない、SNSをやれないことは相対的貧困である」という論調は正しいと思います。でも一方で「スマホやSNSってそんなに必要か？」という考え方もある。そうすると“相対的貧困の基準”を考えるんですよね。支援や福祉施策が上手くいって貧困層が減った際、基準がズレますよね。「基準をもとにチェック」で「貧困イメージ」も変化する。「持つ持たないで貧困を決める」となる。僕は、その基準を安易に横滑りさせることは少し考えなきゃいけないと思います。あとは「貧しいからと言って、大学に行く権利を奪われるのはおかしい。大学を卒業しないと良い会社へ就職できないのに」という話も気になっていて。その通りなんですけど、一方で「大学を出たらみんな就職しているのか？」という問題がある。そういう標準化された人生コースを追うことで本当に“豊かになる”のか、分からないですよね。これからは、貧困の子どもたちが目指す新しい受け皿や新しい居場所を作ると同時に「貧困でない生き方」のイメージを考える必要があると思います。

織田 日本は経済成長とともに「良い高校から良い大学へ、そして良い会社へ」というコースが“豊かになれる人生”として標準化していった。しかし、経済成長が過ぎて状況が変わった今でも、同じ仕組みが続いてしまっている。それでも大人や社会は方向転換できずにいる…という感じでしょうか。

岡崎 まさしくそうですね。その影響なのか、子どもたちが夢を持ちにくくなっています。今の小学6年生に夢を聞くと「トレーダー」とか「ユーチューバー」なんです。仕事のイメージをしっかりと持てていない。「もっと打ち込める職業にしたら？」と言うと「生涯同じ職業なんて無理だから楽な方がいい」と言われます。「そうなの？」と聞いたら「だってお父さんがそう言ってるから」と返されました。親たちも生涯年金や年功序列などが崩れてきているのを感じているんですね。もし貧困の子どもたちが「世の中のためになることをやりたいから、勉強して大学に行きたいんです！」という夢を語ってくれたら嬉しいんですが、今の状況を考えると、それはちょっと甘いのかなと思っています。

織田 子どもたちがそうした考え方になってしまう一番の問題は、どこにあるんでしょうか？

岡崎 一つはインターネットがあると思います。今の子どもたちは情報をすぐに得ることができるので、変に大人化しています。昔は建前だったとしても、親が「努力は報われる」「真面目にやれば良いことがある」ということを子どもに刷り込んでいましたよね。良し悪しは置いておいて、それは高度成長の中で生きるために必要なことだった。でも、今の子どもたちにはそれが信じられない。大人と同じような悩みを子どもが抱えているんですよ。

